

鹿児島の地質22

徳之島の地質

地質担当 鈴木 敏之

徳之島は、鹿児島市から約468kmの海上に浮かぶ南北約26km、東西約14kmの島です。徳之島の中央部には最高峰の井之川岳(645m)をはじめ、天城岳(533m)、三方通岳(496m)、美名田山(438m)、剥岳(382m)など標高300~600m級の山々が連なり山地部を形成しています。

徳之島の地質は、四万十帯の白亜紀付加帯と古第三紀暁新世の花崗岩を基盤とし、その上に更新世の琉球層群が台地をつくっています。南東部の一部を除いてほとんどの地域の付加帯の岩石は花崗岩類の貫入による接触変成作用を受けています。



きのこ岩(天城町)

島の西部から南部にかけては石灰岩と礫や

砂からなる琉球層群が厚く分布します。石灰岩の大部分は切り立った海食崖を形成し、特に西部の犬の門蓋付近では、石灰岩の侵食による景観が美しく、きのこ岩のような形をした岩(きのこ岩)も見ることができます。

徳之島北部のムシロ瀬は、白い岩肌の海岸で景勝地として有名です。節理(割れ目)が発達し、ブロック状に割れてちょうど筵を敷き詰めたように見えます。



このムシロ瀬をつくる岩石は角閃石を含む花崗閃緑岩で、約6100万年前にでき ムシロ瀬(徳之島町)た鹿児島でも古い時の花崗岩類と言われてい

鹿児島の植物37

キンポウゲ科センニンソウ属

植物担当 大屋 哲

夏の頃、道路の植え込みなどに花を咲かせているつる植物を見かけます。キンポウゲ科の「センニンソウ」です。種子につく毛が仙人のひげのように見えるためこの名前がついたと考えられています。鹿児島の方言では、「ウマノハコボシ」「ウマンハオトシ」などと呼ばれます。この植物が有毒で、馬や牛が食べると歯ざしりをしながら苦しむ様子から、これらの方言がついたと言われます。



センニンソウ

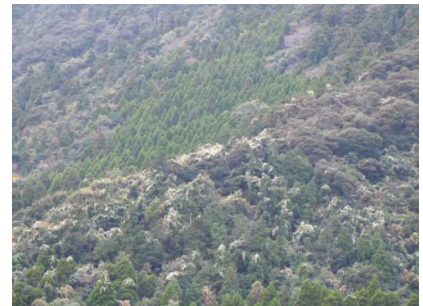
また、同じ仲間です。この頃になると道路沿いの高い樹木に絡まっているものもあります。「ポタンヅル」と言います。アブラナ科の牡丹(ぼたん)に葉が似ており、つるになって伸びているこ



ポタンヅル

とからこの名前がつきました。

この仲間の多くが、夏の頃に花を咲かせるのに対して、12月頃花を咲かせるちょっと変わったものもあります。「ヤマハンショウヅル」です。花の咲いた姿が、半鐘に似るためこの名前がつきました。本県と宮崎県にのみ生育し、県内では、伊佐市や南九州市、肝付町や屋久島町などに分布していません。2010年、12月に南九州市で分布の調



山の斜面に咲くヤマハンショウヅル

査していたところ、たくさんのヤマハンショウヅルが花を咲かせ、山の斜面に白い綿毛がかかったような風景に出会いました。

ちなみにこれらの植物には、花びらがありません。白い花びらのように見えるのは、がくです。

園芸愛好家の間で「クレマチス」と言って親しまれているのもこの仲間の園芸種なんですよ。